

はじめに

鹿児島市教育委員会教育長 石踊 政昭

本年度の「こころの言の葉」作品集ができあがりました。皆様のお手元にお届けできることを大変うれしく思います。これは、「鹿児島市の教育を考える市民会議」の提言を受け、平成十五年度から実施されているもので、九回目を迎えました。これまで、「こころの言の葉」コンクール及び作品集には、各方面から大きな反響をいただいております。

本事業には、面と向かつては、気恥ずかしくてなかなか言えないようなことを一枚のはがきに託し、中学生の親と子の交流を図り、お互いの存在について考えを深めあうという趣旨があります。今年も数多くの「言の葉」が寄せられました。その数、過去最高の一万四千点余。三月の東日本大震災を受け、改めて家族の絆について考えさせられた作品も多数ありました。

この作品集には、中学生の子どもから親へ、親から中学生の子どもへあてた数十編のメッセージが掲載されています。子どもから大人へさしかかる揺れ動く時期の中学生の気持ち、そんな子どもたちに戸惑いながらも正面から向き合い、包みこもうとする親の様子には、読む者の心が揺さぶられます。

御家族皆さんでこの作品集を読み、親や子としての在り方について考える契機としていただければ幸いです。

最後に、素晴らしい「こころの言の葉」を寄せてくださったすべての皆様に心から感謝の意を表し、はじめの言葉とします。

平成二十三年十二月

目次

「ありがとう」の言の葉

―子から親へ―

お母さんへ	4
今度は僕が	5
大嫌い	6
鬼の子ども	7
大人になれた	8
通過儀礼	9
幸せなう	10
母の付せん紙	11
お父さんのメール	12

「慈しむ」言の葉

―親から子へ―

焦らずゆっくり	14
「お母さん」	15
うれしい響き	16
あなたとつながる本	17
たくさんの幸せ	18
このごろ少し	19
消せない言葉	20
娘へ	21
反抗期の終わり	22
父から娘へ	23

「響きあう」言の葉

―子から親へ―

私のお父さんへ	25
オムライス	25
今までありがとう	26
大人になったら	26
時には頼って	27
小さい芽	27
親子は似る	28
あの手紙	28
会いたいよ	29
本当は	29
幸せのコロッケ	30
言いたいこと	30
『素直』って何？	31
父の弁当	31

―親から子へ―

一緒に頑張ろう	33
めんどくさ	33
わかる日がある	34
わかってるの？	34
いつでも待っている	35
家族の一員として	35
毎日がバトル	36
もう我慢ならない	36
サイって言わないで！	37
ありふれた毎日	38
生まれ変わるとしたら	38
息子よ	38

平成二十三年度「こころの言の葉」コンクール入賞者一覧	39
審査員講評	40
編集後記	41

「ありがとう」の言の葉

—子から親へ—



お母さんへ

いつもお父さんに線香を上げられなくてごめんなさい。でもね、

実は誰もいなくなったとき、しっかり線香をあげているんだよ。

あのね、みんながいるところでは、恥ずかしいし、お兄ちゃんに

「どうせ、お母さんの気をひいているんだ。」と思われるのがイヤだし、線香を上げると

お父さんは喜ぶと言っていたけど、それはそうだと思う。でも線香は私たちを悲しませ

たり、お父さんとの距離感がすごく感じられたりして、あまり好きじゃないんだ。お父

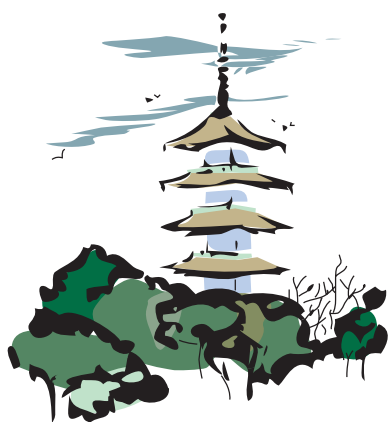
さんはいつも近くにいる、どこかで私を見守ってくれていると私はそう思います。

だから線香のことはかんにんね。



今度は僕が

おじいちゃん、おばあちゃん、僕を中学校二年生まで育ててくれてありがとうございます。僕が小学校四年生の時に、お母さんが亡くなって、もともとお父さんのいなかった僕を支えてくれたのは、おじいちゃんとおばあちゃんです。おじいちゃんとおばあちゃんがいなかったら、僕はどうなっていたのかわかりません。おじいちゃんは今、認知症という病気にかかっています。僕は今まで支えてくれたお礼として、今度は僕がおじいちゃんを支えていきます。そして僕が大きくなったら仕事について、おじいちゃんとおばあちゃんが今まで僕を支えてくれた分をたっぷりと返したいと思います。僕もやっていくことは、やるけど、もう少し僕を支えていてください。よろしくお願いします。



大嫌い

「大嫌い」と、たくさん思いました。

一人になりたい時に限って話しかけて

手がかからないからと一人にして。

さんざん放っておいて、受験生になったとたん、勉強、勉強とうるさくなりましたね。

でも、時々思います。夜寝ている時に

「ごめんね」と言ってくるあなたを

私は大嫌いとは思っていないと気付きました。



鬼の子ども

私は鬼の子どもです。鬼から生まれた子どもです。私の親の頭の上に角がない日はありません。目を細くなるまでつり上げて、手に金棒を持って怒ります。泣きたくなるくらい怖いです。

でも、角がない時間もあるのです。それは、私がベッドで眠った頃。私の部屋に入ってきてベッドのそばで言うのです。布団をかけながら言うのです。頭をなでながら言うのです。

「怒りすぎてごめんね。おやすみ。」と。



怒られないように努力します。私の大好きな鬼たちに、似合わない笑顔が絶えないように……。

大人になれた

いつも家事をこなし、大変な思いをしている母に、私は苦勞を重ねさせてしまう。友達と喧嘩した日は、じっくり話を聞いてくれる。嫌なことがあったら同情してくれる。お稽古事の月謝を払ってくれる。それなのに、反抗して困らせてしまう私がいる。後で謝れば「中学生はそんな時期だよ。」と笑って済ませてくれる。感謝するべきなのに、どうしても素直に気持ちが表示せない。言葉で言い表せないのです。私が作った晩ご飯のオムライスに、ケチャップで「ありがとう」と書いた。とても照れくさかったけれど、母はにっこりと笑ってくれた。

次の日、バースデーケーキにチョコレートで「こちらこそありがとう。」と母が書いてくれた。一つ年をとって一つ大人になれた気がした。



通過儀礼

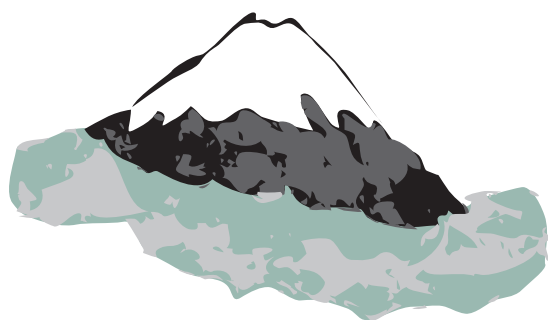
「はみがきした？ 顔は洗った？ ハンカチは？ 行ってらっしゃい、気をつけて。」

返事するまで繰り返される登校前の通過儀礼。

はっきり言って、うざったい。

できることならスルーしたい。

だけどなんだかんだ言っても、それが僕の日常、母の愛情。



幸せなう

私のお母さんは天才です。

どんな天才かというと、私のうそをすぐ、しかも、完璧に見破ります。私は、お母さん
にうそをついて勝利したことが一回あります。でも、本当はうそついたあと、気づいて
くれなかったのです、とても悲しくなり、自分から自首しました。お母さんは、

「気づくに決まってるでしょ。お母さんの子どもなんだから。」
と言いました。

「本当にお母さんの子供なんだなあ。」

幸せなう

母の付せん紙

「今日の天気は？ 傘持った？」

「ハンカチ、ティッシュを確認」

家中に貼られている母が書いた付せん紙

わかっていることを紙にまで書かれると余計に腹がたつ。母は全く私を信用していないのか。おかげで母と言いつい合いになることもしばしば。

でも、時にはあの付せん紙のおかげで、忘れ物せずにすんだり「よかった、助けられた。」と思えたりすることもある。

そう考えると、あの付せん紙は、いつも忙しい母の私へのエールなのかもしれない。私はそっと心の中でつぶやく「ありがとう」。

ただ、付せん紙のおかげで助かったということとは、母には内緒にしておこう。だって素直に伝えたらきつと明日の朝には、また新しい付せん紙が増えていそうだから。



お父さんのメール

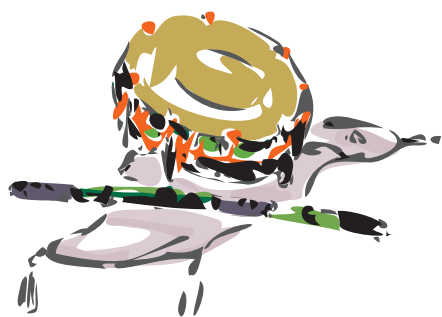
いつも心配かけてごめんね。

私が元気がないとき、必ずメールしてくれるね。正直すごくうざったいけど、すごくうれしかったよ。メールの内容は、「今日、帰ってきたら花火をしよう。」とか「アイス買って帰るからね。」とかおもしろくないメールだけど、あまりメールをしないお父さんが、トラックの中、車の中、会社の中で頑張ってメールしているって思うとすごく笑えて、すごくうれしいよ。

うざくて返信してないけど、お父さんから送られてきたメールは、受信箱の「大切な家族」って名前のついたフォルダに大切に大切に保存しているよ。

返信はしないけど、またメールくれるの楽しみにしてるよ。

私は、メールしてくれるお父さんが、大大大好きだよ。



「慈しむ」言の葉

— 親から子へ —



焦らずゆっくり

〴〵決めた〴〵 と思っていたのに、また迷いが大きくなったり、〴〵できた〴〵 と思っていたのに、また、わからなくなったり、そんな自分にイライラして嫌いになったり、今は楽しいところが少ないと思う日々かもしれないね。

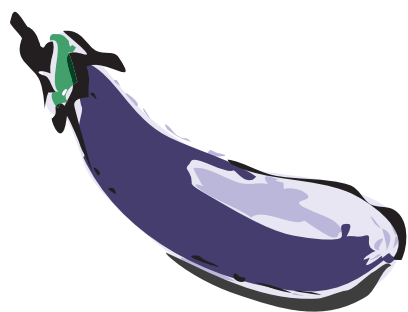
わかるよ、〴〵受験生〴〵 っていう言葉は重いもんね。でも大丈夫。

悩んだことは何一つ無駄にはならないから。

いつかそんな自分を懐かしく誇らしく思える日がきつとくるから。

焦らずゆっくり進んでいこうね。見守っているからね。

お母さんより



「お母さん」

ただいまより先に「お母さん」。幼稚園から帰ってきてても、小学校から帰ってきてても、中学生になった今も、まずは私を探してくれますね。「何」と聞き返すと「なんでもない」という時もありますね。最近、朝、玄関で何かぶつぶつ言って不機嫌な時も時々ありますね。でも帰ってくる頃は、朝のことは全く忘れているのか、いつものように「ただいま」ではなく、「お母さん」ですね。

あとどれくらいこうやって玄関を開けてくるのかな？ いつも、いつも、いつだって「ここよ」と台所やリビング、二階の部屋、そしてトイレからだってどこからだって返事しますよ。あなたの元気で大きすぎる声は、どこからでも聞こえて、そして、私の元気スイッチをオンにしてくれます。

明日も元気に帰っておいで、「お母さん」てね。



うれしい響き

「お母さん、明日早く起こしてね。」

「お母さん、今日のご飯は何？」

「お母さん、ボタンが取れちゃった。」

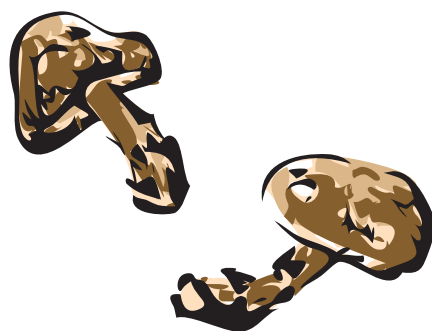
「お母さん、仕事何時に終わるの？」

「お母さん、アイスクリーム食べたいね。」

毎日毎日何度もお母さんと呼んでくる。

「はい」とその都度返事をするけれど、忙しさから、つい「何？」と言ってしまうこともしばしば。でも、どんなに忙しくても、「お母さん」とはうれしい響きです。

あなたたちの「お母さん」でよかった。



あなたとつながる本

「ねえ、この本読んでみて。」

あなたが渡してくれた本を読むたびに、私の頭の中の休止中だった脳が、キコキコと必死で回転しています。

本が好きな子になってほしい、そう思っていました。でもこんなに本が好きになり、追いつけなくなりそうで、少々焦っています。

忙しいから……興味がないから……何かと理由をつけて逃げようとする私をひきとめているのは、やっぱり本で、あなたとつながっていたいからです。あなたの思いを知りたいからです。



たくさんの幸せ

お母さんのとても癒される瞬間を知っているかな？

それは仕事から疲れて、皆どうしてるかなあって心配しながら帰宅した時……

家の中からとても楽しそうな声がして、ワクワクしながら三人を見つける。

あなたのひざの上に妹が座り、弟はぴったりとくっついてじゃれついているの。

ある時はお馬さんごっこのお馬さんになっていたり……

二人に本を読んでくれていることもあったかな。

とてもよく面倒をみてくれるあなたを見て、ふと振り返る……

お母さんはどうだったかなって。

あなたは気づいているかな？

最近勉強で忙しいあなたを、弟や妹が首を長くして待ちわびていることを。

あなたは知っているかな？

なんでもない会話にとっても喜んでいる父親を

あなたはわかっていているかな？

お母さんがあなたに、どれだけたくさんの幸せをもらっているかを。

ありがとう、これからもよろしくね。



このごろ少し

最近、一緒に歩きたがらないよね。

昔は、お母さんの後をどこでもついてきてたのに……。

母は少しさみしいです。

でもね、

この前あなたが、

レジでお金の支払いをしている私の目の前の

重そうな買い物袋を

自分からサッと両手に持って

さっさと駐車場に歩いていく後姿に

頼もしさを感じ

とってもうれしかったよ。

ありがとね。



消せない言葉

中学三年生になり、背も随分伸びたね。ほとんど私と変わらない。伸びた身長の方だけ、心が時々見えなくなってくる。

話をすれば、「うざい!」「死ね!」と辛辣な言葉が胸を刺す。正直寂しい。本音じゃないと分かっているけど、私の心も穏やかでいられなくなる。人の命の長さは誰にも分からない。

どんなに元気な人だって、一瞬先には何が起きるか分からない。だから、どんなに嫌いな相手にも言ってはならない言葉があるんだよ。

私もね、いつもぶつかりあって大嫌いと思ってた父親に、「死ね!」と何度も言った。でも本当に父が亡くなって、あんなこと言わなきゃよかったと後悔の気持ちでいっぱいになった。

どんな相手にも、後悔するような言葉だけは言っちゃいけないと思い知った。出てしまった言葉は、もう取り消せないから……。

あなたにも、私と同じ後悔はしてほしくないんだ。

あなたの寝顔は今もかわいい。いくつになっても、きっと私のかわいい子ども。



娘へ

あなたは覚えていますか？

ドアを破ったこと、鏡を投げつけて割ったこと、お母さんと取っ組み合いの喧嘩をしたこと、お母さんが泣いていたこと。

あれから一年、あなたはずいぶん大人になりましたね。お母さんも大人になりましたよ。思春期のあなたに、お母さんは悩みました。あなたの反抗に、お母さんは命がけだったよ。お母さんの思いが通じなくなった時、あなたはお母さんとは違う一人の人であることを思い知らされました。そのことを認めることがお母さんには必要だったのですね。ごめんなさいね。

それからはあまり口うるさく言わないようにしました。あなたにはあなたのペースがあるのだと自分に言い聞かせ、じっと見守るようにしました。毎日忍耐と努力が必要でした。

あれから一年、少しずつあなたの笑顔が見られるようになりました。荷物をそっと持ってくれたり、椅子をそっと差し出してくれたり、人ごみの中で振り向き気遣ってくれたり……、そんなあなたのさりげない優しさを感ずる今日この頃です。

ありがとうございます。お母さんはとてもうれしいよ。

あなたはまだまだまだ爆発する時があるけれど、お母さんはだいぶ冷静でいられるようになったよ。こうして大人になっていくあなたをお母さんはこれからもずっと見守っているよ。



反抗期の終わり

「生きているとこんなに辛いこともあるんだね……。」「と東北大震災のドキュメンタリーを見ながら、涙を浮かべて言ったよね。「なくなったから、みんな好きなどころへ行けたらいいのにね……。バラバラになってしまった家族も、みんな手を繋いで一緒に好きなところへ戻れたらいいのにね……。」「そう言って二階に上がっていったよね。

それから暫くして気づいたのよ、反抗期が終わっていたことに……。スイッチを○にしてみたみたい……。なくなっただんだね。塾の送り迎えでさえ、食事の後でさえ、小さく「ありがとうね。」って言うようになったんだね。

あの時、「家族と一緒に手をつないで……。」「って言ってたよね。私たち家族へ送ったメッセージだったんだね。

震災の方々が私たちに教えてくださった……。家族はいつでも強い絆で繋がっている。顔を合わせて生活できることほど幸せなものはない……。そう私たち家族に改めて教えてくれたんだね……。ありがとう……。ありがとう……。忘れず、大切にしていこうね。絆も……。いただいた命も……。みんな……。

そして反抗期お疲れ様でした。卒業おめでとう!!



父から娘へ

お父さんと似ているからといって、嘆くなかれ。

父親似の娘は、幸せになると、昔の人は言っていた。

君がぜんそくで苦しんでいるとき、お父さんにもその苦しさがわかる。

君がグズグズしてお母さんに叱られている時、

お父さんは自分が叱られているような気がする。

でも、嘆いたり心配したりすることは何もない。

お父さんは五十年近く生きてきて、今こうして元気でいる。

人生を語り合える友達もいっぱいできた。

君の容姿も人並み以上だとお父さん思う。

君が将来、母親になった時、自分そっくりの子を見て思うはずだ。

この子にも自分と同じように幸せになってほしいと。



「響きあう」言葉の葉

—子から親へ—



私のお父さんへ

お父さんが単身赴任で一人東京に行ってから、もう四カ月が経ちます。お父さんが東京行くと決まったとき、妹は泣いたけど、私は「ふーん」って興味なさそうにしていました。でも、本当はすごく悲しかったです。

毎日お父さんは私たちに電話をくれます。なのに、毎日少ししか話さなくてごめんなさい。でも本当は、お父さんが東京で元気にしているか心配で、電話が来るたびに、とても安心しています。

お父さん、私は照れくさくって、いつも父の日にだって、感謝の気持ちをもうまく使えなくて空振ってしまいます。でも、毎日私たちのために働いてくれるお父さんに、本当に本当に感謝しています。お父さん、どうか身体に気をつけて元気でいてください。本当にいつもありがとう。

オムライス

テストが返ってきた。受験生としていつも以上に頑張った。今年の夏。でも、いい結果は残せなかった。悔しかった。そんな思いで自転車で帰ってきた。

落ち込む私に母は、

「次はきっと上がっているよ。」

と励ましてくれた。

夕食のオムライスにかかっていたケチャップの文字は、いつものグルグル巻きとは違っていた。

“Fight”

心が温まった。

今までありがとう

これから一緒に暮らすことはないけれど、本当に今まで楽しかったよ。

だけどね、私誰にも気づいてもらえなかったけど、毎晩毎晩夜こっそり泣いていたんだ。それは、自分の気持ちをしつかり伝えることができなくて苦しかった。誰かに気づいてもらおうといろいろと工夫してたんだ。

だけど、この前、しっかり伝えることができたから泣かなくなったよ。でもこれから一緒に暮らすことができなくなると思っただけで、また涙が出たんだ。

だけど、また夏休みにでも会いに行uksi、手紙も送るから……

今まで本当にありがとう。お父さんは私の一人のお父さんだからこれからも大好きだよ!!

大人になったら

お母さん、いろいろなことを教えてくれてありがとう。こどもの時から障害があるけど、いつでもぼくを守ってくれてありがとう。大人になったらお金持ちになって、いつかはとても楽にしてあげて、自分がいやになったりしたけど、お母さんがいたからここまでこられたんだと思っていると、障害があっても、これを勉強だと思えばいいと思いました。

時には頼って

何でも一生懸命なお母さん、人に気がつかいすぎるお母さん、そんなお母さんは少しめんどうくさいけど、私の自慢です。

お父さんもいなくって、一人一生懸命働いて私を育ててくれました。「自分のことより、人のこと。」そんな性格のお母さん。もっと自分を大切にしてください。私も、もう、十五歳です。頼りないけど、時には頼ってください。お母さんが、私のためなら頑張れるようにね。私もお母さんのためなら、頑張れるから。

小さい芽

「ありがとう」という一言。その一言がどうしても言えない。お母さんはいつも言っている。

「何かあったら言ってね。」

言えるわけがない。お母さんに相談しても、いつも笑顔だから。その笑顔を見ると、心がズキズキ痛む。私は母に心を閉ざしたままだった。親に言ってもわかってくれないから。そして、私が友達のことで、悲しいことがあって、二階で泣いている時のことだった。お母さんが走ってきて私を抱き締めた。

「笑顔が一番」と言いながら。その時、私の心の中の小さな芽が花を咲かせたのだ。花が咲いたと同時に涙がいっぱいあふれた。

お母さん聞こえてる？そのうち、絶対お母さんの瞳を見て、ちゃんと自分の口でいうから。

「ありがとう」という一言を。

親子は似る

「あんたは声がお母さんそっくり」とおばあちゃんが言う。

「お兄ちゃんは、性格も声もお父さんそっくり!!」と私がいう。

親子はやっぱり似るものだ。いやなところも似てしまう。例えば、私のおっちゃんこちよいの所とか忘れっぽい所とか、お母さんにそっくりだ。

お兄ちゃんのお金にうるさい所はお父さんそっくり。

そういえば、お母さんの性格は誰に似たのだろうか？多分おばあちゃんかおじいちゃんかなあ。今度、おばあちゃんに聞いてみて家族みんなで笑おうかなあ。

あの手紙

この前こっそり渡してくれた、あの手紙。それを読んで、本当に涙が出てきたよ。この頃、反抗心が沢山あって、でもそれを言葉にできなくて。そしたら、イライラしてね。悪循環だったことは分かっているんだよ。

だから手紙で自分の気持ちを伝えてみたんだ。

すると手紙が返ってきてね。それを読んだら、悩んでイライラしてたのは、自分だけじゃなかったんだ。

自分の気持ちを抑えずに話しても大丈夫なんだ。

一人で悩んで泣かなくてよかったんだ。そういう思いがどっと溢れてきたんだ……。

この前、こっそり渡してくれた。あの手紙。

それを読んで本当に涙が出たんだよ。

会いたいよ

ちようど昨日、八歳・九歳の誕生日にママから送られてきた手紙を読んだよ。「大きくなったかな。やさしい子になってね。パパのお手伝いしてね。ママはずっと大好きだよ。ママはいつでも頑張れて応援してるからね。」って書いてある。読むたびに、「ママあ、私は元気になったよ。手伝いもたまにやってる。パパも兄ちゃんも元気だよ。私は今でもママに会いたいよ。」

ママは知ってるかなあ。私が手紙を読むたびにいつも泣いていることを。会いたいよ。どこにいるの。今でも大好きなら会いにきてよ。

私は、もうすぐ高校生になります。しっかり卒業して立派な大人になったら、ママを探して会いに行きます。だからずっと大好きでいてね。

パパも兄ちゃんも元気に暮らしているからね。

本当は

毎日喧嘩して「うざい」「きもい」ってたくさん言ってるけど、「大好き」って素直に言えないものなんです。

本当は大好きなんです。

素直になれないけれど。

なんていったって私のお母さんだから。時にはケンカもしてたくさん泣いているけど、いつのまにか仲直りしていて、笑顔がたえない。そんなお母さん、家族が大好きです。

これからもたくさん壁に当たり、つまづくこともあると思うけど、私はこの家族に生まれてよかったって思います。

幸せのコロッケ

私はお母さんの作るコロッケが大好きです。

「今日の晩ご飯はコロッケだよ。」

と母がいうと、叫びたくなるくらいにうれしいです。イライラするときや、嫌なことがあったときでも笑顔になれるコロッケです。そのコロッケはあげたてで、ふっくらしていてサクサクしていて、幸せな味がします。

母はきつと素直な心で、優しい気持ちで作っているから幸せなコロッケになるのだと思います。お母さんいつもありがとう。

言いたいこと

私はお母さんたちに言いたいわがママがあります。

私がいる時にお金の話をしないでください。

もちろん、私の塾のことだって。その中に入ってます。でも聞きたくないんです。まだ全然決まらない進路の話だって、私は聞きたくないんです。ごめんなさい。あと、中一の私の誕生日に、お母さん、絵を描いてくれたよね。

あの絵、いらないうって言ったら、お母さんごみ箱に捨てたけど、実はあのあと、拾ったの。今もずっと持ってる。

ごめんなさい。それを言いたかったんです。

『素直』って何？

「ごめんなさい。」（本当に私が悪いの？）
「ありがとう。」（こんなことしてなくてよかったのに。）

私は時々こんなことを思ってしまう。
お父さんやお母さんは、謝罪や感謝の
気持ちは素直に言いなさい、なんて言っ
てるけど、心のこもっていない言葉でも
口に出したら『素直』なの？

たまに私は思ってしまう。お父さんに
注意されて、すぐ謝らない妹の方が素直
なんじゃないかって。すぐ謝らないのは
良いことではないけれど、自分が思っ
ていないならそれでいいんじゃない？そ
れって自分に『素直』ってことじゃない
の？

ねえ、お母さん、お父さん。『素直』っ
て何？こんな事どうでもいいって思うか
もしれないけれど、私は今、ささいなこ
と一つ一つに疑問を抱いてしまう。頭
の中がぐちゃぐちゃの私を助けて!!

父の弁当

「今日のお弁当、美味しくなかった。」
時々、父に言ってしまう言葉。私が学校
に持っていくお弁当は、いつも父がつ
くってくれているのだ。忙しく、朝起き
られない母に代わって毎日毎日早起きし
てくれている。でも、父の作るお弁当は、
やっぱり男っぽく少し雑な中身なのだ
た。

「残り物ばかり！」「冷凍食品ばかり！」
毎日作ってくれることが、ありが
たいと分かっていても、ついつい口に出
してしまう。私に言いたいだけ言われた
後に、父は、反論もせず、ただ寂しそう
に笑っているのだった。でも、こんなに
口の悪い娘だけど、ちゃんと知っている
よ。毎日必ず、私の大好きな手づくりの
卵焼きが入っていることを。不器用だけ
ど、必死でかわいいお弁当を、精一杯の
愛情で作ってくれているということ。

「響きあう」言の葉

— 親から子へ —



一緒に頑張ろう

中学校に入ってから、あなたに話し掛けると「何？知らない。」または無視。三人兄弟の真ん中で長女。小さい時から気づいたら自分で何でも進んでできたね。あの夕食の時、はしを投げて「お母さんになにがわかるの」と泣いてぶつかってきたことがあった。妹の誕生日のカードに「お母さんのいう事聞いて、困らせないんだよ。」と書いた言葉を見て涙が止まらなかったよ。とってもうれしかった。お互い素直になれず、すれ違えばかりだけど、あなたの優しさは一番わかってるから、高校行かないって言い得ね。きっと自分の道が見えてくるから。一緒に頑張ろう。

めんどくさ

「めんどくさ。」君がよく口にする。確かに面倒くさいことはたくさんある。母さんの中二の頃は、親に聞こえるように言っていただろうかと思いい出してみた。心の中では思っていたけど、ふてくされた態度で示していたかもしれない。「めんどくさ。」という言葉を聞くと、一瞬、腹が立つときもあるが、このはやり言葉のせいだろう。なんだかんだ言っても、この夏休み、ラジオ体操の時間には、二声ぐらいで間に合うように起きてきたし、家の手伝いもしてくれたね。やらなきゃいけないことはわかってるんだよ。ね。かあさんも君たちが自立するまでは、はやりの言葉や今風の子供たちの流れにつき合いながら楽しみたいと思いません。周りの人たちを大切に思う気持ちは忘れないでください。言っている時、悪い時、言っているいい相手、悪い相手、一緒に考えていこうね。

わかる日がくる

「私のこと全然わかってない!!」

「お母さんの気持ちわかってないでしょ!!」

とロげんかになるけど、大丈夫だよ。わかる日がくるよ。

二十五年前のお母さんとおばあちゃんも同じだったから。

いつかあなたが母親になって悩んだ時に「あなたもそうだったよ。」

と、おばあちゃんになったお母さんが言うからね。

その日まで、見守ることに決めました。大丈夫だよ。わかる日がくるよ、きっと。

わかっているの？

「わかったから……」

「もうわかってるから……」

私があなたに何かを言おうと口を開くと、すかさず「わかったから……」

とあなたは口を開く。

えー何がわかったの？

本当にわかっているの？

と母は少し不安です。

でもあなたは悩んでいるんだよね。

私もわかっているから……

ゆっくりでもいいよ。

ずっしりと実がつまる日がくることを楽しみにしているからね。

いつでも待っている

四人の子供の中でしっかり者のあなた。二、六五〇グラムと小さく産まれてきて、しわくちやで大丈夫かなあと心配していた。

今ではあと二センチでお母さんを抜きそうですね。

しっかり者だったので、弟の世話などいろいろなことをさせてきたね。安心して任せることができたから、お母さんの方があなたに甘えていたのかもしれない。

「私も本当は甘えたい」と知った時、お母さんは、恥ずかしく、あなたに無理をさせていたと思った。ごめんね、気づかなくて。

もう無理しなくてもいいよ。甘えたい時は、甘えて本当のあなたを見せてください。お母さんはいつでも待っているからね。

家族の一員として

「洗濯物干して」

「えーっ」という息子の声。

「お母さん、仕事で疲れているから」

「僕だって学校で疲れている」

このやりとり何度あったらうか。

最近では「今日どっちする？洗濯？茶

碗？」

と言えば兄弟で分担を決めている。

お手伝いじゃなく家族の一員として当

たり前の仕事をしてきている。とても

役に立ってくれて助かっています。あり

がとう。

毎日がバトル

中学生になった!!

身長だけは伸びた!!

でかくなった!! たしかに……

失礼!!

心もしっかり成長しています。

口数だけが多い母親……

寝顔に微笑みかける……

可愛かったなあは、小さかった頃。

あなたが元気でいてくれること、

それだけで十分……

今は毎日がバトル

反抗期という成長期であります。

もう我慢ならない

君の将来を思うと、母は心配でしょうがない。散らかった部屋、脱ぎっ放しの服、未提出のノート、下がる一方の成績……。もう我慢ならないぞ! あせる母をよそに、やる気のない態度が私に火をつけた。しかし、汚い言葉を浴びせたところで何もすっきりはしない。のびのび育てたいと思っていた「お母さん」はどこへ行ったのか……。『こうしなさいよ』『あんな風にやったら』自分のことは棚にあげて、その棚にはもう何ものせられないぐらいに口を出してきた。

本当はね、私だってできなかったことばかりだったんだよ、申し訳ない。

普通なら「君のペースで、少しずつ」というところだろうけれど、そういう言葉を言えない母なんだ。でもやさしい言葉も、たくさん持って準備してあるんだよ。

サイって言わないで!

確か、Mちゃんが二、三歳の頃、怒りながら、「ママ、サイって言わないで!」「Mちゃん、サイが嫌いなのに!」って言ったね。初めは何の事がわからなかったけど、その頃のママは「早くしなさい」「片付けなさい」ってサイばかりつけてたね。小さなMちゃんにそんなこと言われてびっくりしたけど、その後サイはやめました。どうしたらサイを言わないで済むか考えて、「もちよつと早くしてみようか」「ちゃんと片付けようね」言い方を変えただけで魔法のようにママもイライラしなくなったし、子どもたちもちゃんとしてくれるようになって子育てが楽しくなったよ。小さなMちゃんに教えられてママもちよつと成長したエピソードでした。

ありふれた毎日

毎日お母さんの怒鳴り声で目を覚まし、怒鳴り声で眠りにつく君たちにとってお母さんはウザイ存在かもしれないね。そして君たちは、母さんいつも怒ってるって思ってるよね。でもお父さんもお母さんも、君たちのおかげで、怒ったり、笑ったり、感心したり……毎日ほんと、楽しんだよ。ありふれた毎日が幸せなんだなって最近しみじみ思うよ。これからも元気で楽しく頑張ってるね。

生まれ変わるとしたら

「お母さん、もし生まれ変わったら何が
いい？わたしは聴こえる人に生まれ変わ
りたいの。だって、お母さんも聴こえる
わたしが好きでしょう。」

あれから十年あなたはたくさんの友達や
先生方、周りの人に支えられ、見守られ
て伸びてきたね。あなたが小さい時から
思っていたことだけど、あなたの明るさ、
創造性の豊かさ、人を思いやる優しい心
は周りの人を幸せにする力があるよ。だ
から支えられているだけでなく、十分、
支える立場にも立っていると思うよ。今
でも聴こえる人に生まれ変わりたい？
きっとそうだよね。

あれから十年、あのとときも、今も、そし
てこれから

「お母さんはそのままのあなたが大好き
。」

息子よ

中学三年の夏休み。受験生と呼ばれる
ようになったおまえは、その呼び名にと
まどってるようだ。

それは高い山を見上げて、自らを奮い
立たせている登山者のようでもあり、巢
立ちを前に、高い木の上からおそるおそ
る下をのぞき込むひな鳥のようでもあ
る。

息子よ。一步踏み出してみろ。そして
思い出せ。息を切らして登った山の頂か
ら見えた景色を。登る前には想像もつか
なかった世界が広がっていただろうか？

息子よ。思い切って羽ばたいてみる。
おまえはまだ未熟だけど、ちゃんと空を
飛べる羽を持っている。広い空を飛ばば
自分の進むべき道も見えてくるさ。

息子よ。迷わず、自分を信じて進め。

お父さんはおまえを信じている。おま
えならやれる。

平成 23 年度 「こころの言の葉」コンクール 入賞者一覧

中学生の部		親の部	
賞	氏 名	賞	氏 名
大 賞	木田 夕菜	大 賞	國見 純子
準大賞	日高 織恵	準大賞	石田奈央美
準大賞	吉 さなえ	準大賞	上野 智子
優秀賞	中村 麻鈴	優秀賞	二川 節子
優秀賞	塩入谷春佳	優秀賞	濱田あけみ
優秀賞	幸 玲司	優秀賞	野平 敦子
優秀賞	岩切 瑞希	優秀賞	西山 智恵
優秀賞	枝元 祐貴	優秀賞	岡元 陽子
優秀賞	柳崎 麗	優秀賞	藤田 一知
入 選	井立田茉乃	入 選	横路 優子
入 選	橋口 萌花	入 選	池野 知子
入 選	山内 舞香	入 選	永田 和子
入 選	西村 幸翼	入 選	佐藤まゆみ
入 選	齋藤 朱音	入 選	寺田 和子
入 選	四元 美玖	入 選	別府ひろみ
入 選	木ノ上万結	入 選	河口加代子
入 選	山口 優希	入 選	新 美幸
入 選	山之内未夢	入 選	新沢 裕美
入 選	西之園有希	入 選	川添 恵好
入 選	迫田 真由	入 選	田中 雅
入 選	竹迫 宏華	入 選	水之浦 勉
入 選	松永 愛加	応募数：中学生 13,751 点 親 345 点 総数 14,096 点	
入 選	田中 早紀		

特別賞	星峯中 PTA
-----	---------

※本人の了解が得られた方のみ掲載しています。

審査員講評

審査委員長

千々岩弘一

一九九五年の阪神淡路大震災から一六年後、日本は、また自然の脅威を目の当たりにした。大津波に飲み込まれた東北の沿岸地域、原子力発電所崩壊による放射能汚染に苦しむ福島県。そこにも、「中学生と保護者との平穏な日常」があった。しかし、東日本大震災は、それぞれの地域に暮らしていた「中学生と保護者との平穏な日常」を一変させた。天災とはいえ、あまりにも悲惨な現実が、中学生を襲った。

この大震災は、遠く離れた鹿児島でも様々な形で影響を与えている。マイナスの影響ばかりではなく、被災地の方々に思いを巡らす優しい気持ちの発露や災害派遣活動・ボランティアなどの具体的な行動といった影響もある。本コンクルの応募作品にも、この大震災を取り上げながら、改めて「今の自分の姿」を見つめた作品があった。

本コンクルの目的は、「今」を生きる中学生とその保護者に、そして「作品集」を通して鹿児島市民に、お互いの存在のかけがえのなさを実感していただくことにある。

悲しく辛い大震災にも負けず、そして日々の苦しみや葛藤に負けず、お互いの存在のかけがえのなさを噛みしめながら「生きる」ことを続けていきたいものだ。その一助に、本コンクルがなれるとすれば、これほど意義深いことはない。

鹿児島国際大学教授

坂尾加代子

今年は大震災の影響を受けたためか、日本中で「絆」という文字を目にしました。それは、すべての人が心を寄せ合って、支えていこうという気持ちの表れと感じました。

今年も絆を深めたいという願いを込めた、たくさんさんの「このころの言の葉」が寄せられました。「言の葉」の数ほど家族の型があり、そこから生まれてきた「言の葉」は実に多種多様で、一葉一葉が、かけがえのない重みのあるものでした。

思春期にいる子どもたちに戸惑いながらも、我が子を信じて見守っている親の姿に学ばされました。一方、子どもたちからは、「私の心の中を見て!」とか「認めてほしい」など、親の気づきを待っている子どもの姿も見えました。「言の葉」によって知ることのできた「心の声」を大切にしたいと思えます。今回は特に父親へのあたたかいメッセージが多く、また、子どもたちが親の健康を気遣ったり、ねぎらいの言葉を紙面いっぱい綴ったりしているものも多く、「言の葉」全体がやさしさに包まれているようでした。「書く」ことで親も子も、お互いの存在の大切さを再認識することができたのだと思います。そして、親と子の心の絆の深さをしっかりと感じました。

「当たり前という奇跡!」「普通という奇跡!」を生かされているということ、保護者からの一葉によって、改めて気づかせていただいたことを、いつまでも忘れません。

市「さつまっ子」育成市民会議副委員長

田中優子

「どんなことを書こうか」。原稿用紙を前に首をかしげ、ほおづえをつく中学生の姿が目につく。親への感謝の気持ち、自分を分かってくれないことへの不満、反発心。気恥ずかしい、照れくさい、腹立たしい。振り幅の大きい振り子のよう、揺れ動くさまさまな心情をつづった「言の葉」を読む機会に恵まれた。ほほ笑ましいもの、身につまされるもの、とさまざまだが、いずれも「いつか来た道」と思えた。

一方で、慈しみ信頼しながらも、一筋縄ではいかぬ我が子の成長過程に戸惑う親の姿があった。自分の未熟さをときに反省し、子育てに悩む親心に触れることができた。

口に出せない心情も、文字でなら表せる。提出された作品をそのまま、親として子が互いに面と向かって言えたなら、どれほど親子関係は円滑にいくだろうか。だが、それができぬのが親子。だからこそ、「このころの言の葉」コンクルに意義があるのだろう。

中学生の作品には、「うざい」「○○なう」と今どきの若者言葉が目立った。メールの存在も日常となっている。「言の葉」は時代を映す鏡でもある。

子を持たない人はいるが、親を持たない人はいない。多くの人に、この作品集を手にとってもらえれば、と願っている。

南日本新聞社 編集委員

山元一八

本コンクールも九年目を迎え、生徒の応募総数が年々増加の傾向（市内国公立私立生徒の約八割が応募）をたどりつつあることは大変喜ばしい。改めて市当局の御尽力と各学校の取り組み並びに生徒諸君の努力に対し、心から敬意を表したい。他方、保護者の応募数が減少の一途をたどりつつあることは今後に残された大きな課題であろう。

自己表現能力・コミュニケーション能力育成が叫ばれる中で、生徒は第二反抗期に入り寡黙になり、自己の内面を表出しがらなくなる。周囲との軋轢に悩み、そして時に孤独に陥りやすい時期でもある。しかし、全作品、短い文章にそうした生徒たちの本音が、つぶやきや心の底からの叫びとなつて、見事に表出されている。また、保護者の作品にも、読者の魂を揺さぶる作品が多い。涙なくしては、読むことはできない。新鮮且つ大きな感動を与えてくれる。まさに珠玉の「こころの言の葉集」といふべきであろう。

今年、東日本大震災とそれに伴う原発事故という未曾有の災難に遭遇した。ある母親は言っている。「夜、一連の報道を家族一緒に見た娘は、見終わった後、『家族みんな手をつないで好きなところへ戻れたらいいのに……』と、涙ながらに一言残して二階の自分の部屋に行った。その翌日から娘の生活は一変した。娘は反抗期を卒業していた……。」と。

私はこの少女は今自分が生きて在ることや、家族の絆のありがたさや生命の尊さを実感し、何かを固く決意したのだと確信する。

すべての作品が反抗期真っ只中の本市の中学生が、鋭敏で心豊かでみずみずしい感性と力と優しさの持ち主であることを示していたことに感動するとともに、激励の拍手を送りたい。

親や教師は心を澄まし、彼らのこうした豊かな感性と力と変容を「観るべき」「聴くべき」であり、「気づくべき」であろうと思う。

本誌が各場で十分に活用されることを心から期待したい。

元公民館長

外城戸昭一

このコンクールは、親と子のコミュニケーションがなかなかできず、「想い」がうまく相手に伝わらないもどかしさを音声による言葉ではなく、手紙やメモ、付箋紙などいろいろなツール（道具）を使い、今の「想い」を「言の葉」として伝える、いわゆる心のキャッチボールです。

私自身、初めて審査にかかわり、多くの感動に触れることができました。どの作品も力作ぞろい、作者の「想い」や心の変化が手に取るように分かり、その家庭での情景が思い浮かべられました。中学生の作品では、同世代の頃の私自身と比べてみたり、親の作品では、今の子どもに対する「想い」を比べたりと、作品に触れるごとにどっぷりとつかり込んでしまいました。今回は特に、父親から子へ、子から父親へ伝える作品が多く、父親の私としては、ホッとしたり、ドキッとしたりと、楽しく読ませていただきました。

最近が集団での行動が苦手、うまく自身を伝えられない子どもたちが増えています。形はどうあれ、いろいろなツールを使い、相手に伝えてみることから始めてください。今の「想い」「こころの言の葉」を大切に保管し、いつか自分たちが大人になった時もう一度見ていただきたいと思います。

鹿児島市PTA連合会会長

編集後記

関係の皆様は御尽力により、第九集「家族の絆」が完成しました。過去最高の応募数は、各中学校での取組の成果と感謝申し上げます。

今年新たな試みとして、保護者に対して従来の一括応募、郵便での応募に加え、電子メールでの応募も始めました。応募作品には、「メールで応募ができる」とのことで、思春期の男の子を持つ母として気軽に思いつくままを言葉にしました。」とか「学校に提出するのはためらわれ、メールで応募することにしました。」などという感想も添えられました。今後さらに活用が増えるものと期待しております。

また、新設した特別賞には星峯中学校PTAが輝きました。PTA版「こころの言の葉」を手がけ、保護者のメッセージ集を各戸に配付し、それを読んだ中学生の感想文を再度配付するといった、心の交流が高く評価されたところです。

これらは、「こころの言の葉」コンクールの広がりや深まりを表すものといえましょう。本事業をさらによいものにするために、皆様の御意見・御感想をお聞かせください。

来年度は、事業開始十周年の節目の年を迎えます。事務局では、記念事業に向けて、準備を進めているところです。事業の趣旨を理解していただき、さらに多くの応募をお待ちしております。

こころの言の葉

～第9集 家族の絆～

平成23年12月20日

発行 鹿児島市教育委員会
〒892-0816 鹿児島市山下町6-1
TEL (099)227-1941 FAX (099)227-1923
Email : sidou11 @ city.kagoshima.lg.jp